永えに地域のシンボルたれ

阿南高校特色化に向けての提言書

長野県阿南高等学校　同窓会

特色ある阿南高校づくりワーキング・グループ

令和７年５月

目次

１．　はじめに　阿南高校の歴史と現在の直面する課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・３P

２．　提言の背景　・・・・・・・・・・・・・・・・・４P
（１）　平成３０年の「魅力ある阿南高校づくり委員会」の提言
（２）　県教育委員会の「再編基準」の保留と再検討
（３）　地域一丸となった活動が高校を育てる
（４）　同窓会としての危機感と要望

３．　阿南高校の概要・現況　・・・・・・・・・・・・・・・・・５P
（１）　ANAN２０２５年パンフレット
（２）　「伝統文化教育を地域とともに」（学校長レポート　R６年）

４．　県教育委員会の新たな方針　・・・・・・・・・・・・・・・・・５P

５．　この提言のめざすものと大切にしたいこと　・・・・・・・・・・・・・・・・・６P
（１）　高校と地域の存続発展を一体のものとしてとらえる
（２）　「地域で学ぶ」ことの意味を深める
（３）　全国からの募集と循環型教育をめざす
（４）　高校を若者の集積拠点として位置づけ地元は生徒と高校を全力で支援する
（５）　県教育委員会の「地域課題探求型」の活動を重視する

６．　魅力化・特色化のための理念、指針、目標をどう考えるべきか　・・・・・・・・・６P
（１）　理念と指針
（２）　目標を考えるうえでの問題意識
（３）　めざしたい学科、コースなど教育課程の構想５．
（４）　考えたい学科、コース、類型のイメージ
（５）　生徒の人間力の育成と集団活動の大切さ（文化、スポーツ活動）

７．　条件整備・活動支援として行政にお願いしたいこと　・・・・・・・・・・・・・・１２P

８．　全国の優れた事例に学ぶ　・・・・・・・・・・・・・・１４P

９．　終わりに　・・・・・・・・・・・・・・１６P

２０２５年5月２０日

阿南高校魅力化・特色化への同窓会としての提言

長野県阿南高等学校同窓会ワーキンググループ

１．　はじめに

阿南高校の歴史と現在の直面する課題

阿南高校は昭和２５年（１９５０年）に下伊那郡南部１０余村の熱望により組合立として設立され、後に、県立に移管された７５年の歴史をもつ普通高校です。

下伊那郡の南部地域は飯田市から天竜川と JR 飯田線に沿って、概ね２５キロから４０キロ余り南に下った山紫水明・風光明媚の地にあり、道路事情も不便で、明治以降長年にわたり教育と文化の光の当たらない地域とも言われてきました。

戦前からの旧制中学設立運動を引き継ぎつつ、戦後の極めて困難な社会情勢のもと、地元の行政、教育の関係者はもとより地域住民全体の熱意と取り組みで後期中等教育の拠点となる新制高校として誕生しました。

生徒は質素勤勉、誠実配慮の気質に満ち、現在までに卒業生は１万人を超え、広く社会と地元地域に有為な人材を送り出してきました。

しかし、戦後８０年の歴史の中で社会環境も大きく変化をしました。今日、下伊那郡南部地域の過疎化と少子高齢化は極めて深刻な形で進行しています。南部地域で誕生する子供の数も平成の後半から令和に入りその激減は際立っています。中学３年生の生徒数も今後、令和１５年までは８０名から９０名で推移すると思われますが、令和２０年には３０名程度まで減少すると見込まれています。半世紀まえの昭和５０年前後には、南部地域だけでも６００名を超える中学３年生が在学をしていたことを思うとまさに隔世の感がいたします。

阿南高校もその流れの中で、令和６年度現在、在籍生徒数は全学年合計で 133 名。令和７年度は１２０名余の生徒でスタートを致します。今まさに学校存立の危機に直面しているという状況にあります。

下伊那郡南部地域の人材育成に大きな貢献をしてきた阿南高校がなくなれば、中学卒業生はすべて域外の高校で学び、日中にはこの地域に１５歳から１８歳の生徒がいないことになります。遠方への通学は生徒や保護者の時間的･経済的負担が増えることになりますし、生徒とともに域外に世帯ごとに転出していく家庭が増大していくことになりかねません。

生徒たちは人間関係形成の上で大切な青春時代を域外の高校や大学で過ごすことになり、どうしても地元地域への愛着が持ちにくくなり、卒業後も地元に戻りづらくなる可能性が強まります。

阿南高校の存続・発展をはかっていくことは、子供たちの発達、成長にとって重要な課題であることはもちろん、南部５町村にとっては、地域の存続に密接にかかわるきわめて重大な課題としてその重要性が増していることを認識する必要があると考えます。

２．　提言の背景

（１）　平成３０年（２０１８年）の「魅力ある阿南高校づくり委員会」の提言とその後の推移

南部５町村の「阿南高校協力会」の下、地元中・高教育関係者や地域代表者による検討委員会で作成された平成３０年の「魅力ある阿南高校に向けての提言書」に基づき、地元では実践活動が粘り強く進められてきました。しかし、経済・社会環境の変化とその影響は大きく、生徒数の減少に歯止めをかけるにはいたっていません。現在、高校の存続可能性はより厳しさを増していると言わざるを得ません。

この「平成３０年提言」は住民アンケートの実施も含め、非常に丁寧な議論・検討を経て作成された実行可能性の高い答申です。高校側・先生方もその答申を受けて、掲げられた諸課題の実践に大変な努力をされ、行政や地域も協力をして、貴重な成果と経験を蓄積してこられました。しかしながら、そうした大きな努力にもかかわらず、残念ながら厳しい状況を打開するには到達していないという状況が現実です。

（２）　県教育委員会の「第二次再編基準」の保留と再検討

下伊那郡南部地域の過疎化、高齢化、少子化は予想以上に急速に進んでいます。
県教育委員会自身が「想定を上回る少子化や情報通信技術（ICT）の浸透など教育環境が大きく変化する」なか、高校の統廃合は、「地域によっては過疎化をより促進しかねない」との懸念から、現行の再編方針をいったん「保留」とし、「特色ある県立高校へ新方針」を提示することとなりました。（令和６年）

その中で、阿南高校を含めいくつかの高校はいずれも県境にあり、地域との協力を強調しつつ「中山間地存立特定校」への指定の可能性を検討するという状況になったわけです。

こうした状況に鑑み、同窓会としては、現状の打開をはかるうえで、高校や地元町村の関係者の皆様に、状況の共有化と事態を切り開くために一段と高いレベルの「連携と協働活動」を呼び掛ける必要性を認識し、同窓会としての提言を行うことに致しました。

（３）　地域一丸となった活動が高校を育てる

数十年後には自治体消滅の危機すら指摘する研究レポートもあり、従来の延長線上の改善努力では、現状の存続危機打開への大きな転換には結びつかないと考えられます。

県教育委員会の今回の新たな判断・方針と阿南高校・地域のこの間の活動の実績、到達点を尊重しつつ、事態打開につながるより積極的な「特色ある高校づくり計画」の策定と「地域一丸となった活動推進体制」を構築することが今緊急に求められているとの考えに至りました。

（４）　同窓会としての危機感と要望

阿南高校同窓会は、①同窓生の親睦・交流、②母校の発展、③生徒の皆さんの活躍と成長を願い応援することを目的とする組織です。何より卒業生として自分たちを育ててくれた母校と地域への強い愛着を有しています。

私たちは、この間の７０余年にわたる高校の歴史と果たしてきた役割を踏まえ、同窓会の役割、性格上の限界性も認識しつつ、高校、地域行政、教育関係者、地域住民、企業関係者の皆様に、更に長野県教育委員会、県行政にかかわる皆様に対しまして、阿南高校の存続と発展を確保するための「地域一丸となった活動の推進」に、参加・協力・支援をお願いしたく、そのために重要と思われるいくつかの要望を提言として準備・提出をさせて頂くものです。

３．　阿南高校の概要・現況

令和７年４月現在の在校生は、全学年合計で１２２名です。その内訳は、概ね地元の下伊那郡南部から三分の一、飯田市から三分の一、下伊那郡北部から三分の一という割合です。

高校の現況と概要は、下記の二文書が正確で詳しいので、あえて再述を避け、二文書の記載をして概要紹介とさせていただきます。

（１）ＡＮＡＮ　２０２５年パンフレット参照

（２）「伝統文化教育を地域とともに」（学校長レポート　R６年）参照

４．　県教育委員会の新たな方針

令和６年度に長野県教育委員会がとりまとめた「県立高校の特色化に関する方針」が同窓会の提言を考えるうえで重要な指針となるものと考えます。この概要を列挙し、阿南高校に具体化(活かしたい施策)できないかと考えるものです。

県立高校の特色化に関する方針

（１） 様々な選択肢から、自分の進路に向かって学びたいことをとことん学べます。

（２） 社会に求められる技術・能力が身につきます。

（３） 長野県のリソースを使った地域での学びができます。

（４） 一人ひとりの個性や多様性が尊重されます。

（１）では、

① 特定の大学への進学支援

② 大学との連携

③ 英語教育の進化、海外大学進学への意思形成

④ 中山間地校での ICT による遠隔授業

⑤ 職業科における進学支援

⑥ デユアルシステムの充実（職業体験、企業とのコラボ、働く大人との出会い）

⑦ 企業家マインドや時代が求める学び（地域が求める起業マインド）

（２）では、

① 全国募集

② 介護福祉士養成コースの設置

③ デジタル人材の育成

④ 職業教育のさらなる充実

⑤ メイクやマナーなどの学びの場の提供

（３）では

① 長野県らしいカリキュラムの編成（「地域課題」を題材にした探究的な活動・信州学の一層の充実）

② 学校における地域とのコーディネート

③　高校の地域拠点化（地域の拠点となる、学校の枠を超えた共学共創コンソーシアムを全校に設置）

（４）　では

①　個別最適な学びの推進（多様な科目選択、単位制の導入）

②　キャリア教育の充実

③　生徒の幅広いニーズに合わせた支援

④　中学生への新たな希望調査

⑤　現代にふさわしい入学者選抜制度の在り方

⑥　入学後の転入・転科

５．この提言のめざすものと大切にしたいこと

（１）高校と地域の存続発展を一体のものとしてとらえる

人口 11,000 人の下伊那郡南部地域（阿南地域５町村エリア）における唯一の県立高校の存続と発展を地域の存続発展と分かちがたく結びついた重要課題として認識し、追求する立場です。

（２）　「地域で学ぶ」ことの意味を深め、「地域を創造する」主体の育成をはかる

地域社会との密接な結びつきの中でこそ高校の存続と生徒の成長は確保できるとの認識から、地域探究・地域連携・地域協働の深化を図ることで地域創造主体の育成を重視する視点です。

（３）　全国からの募集と循環型教育をめざす

一方で地域住民と生徒のニーズに応え、他方で、広く地域外の生徒のニーズにも対応していく、双方を両立させうる授業・学習システムを構想することを県教育委員会や高校、先生方に要望する視点です。特に、地元への愛着を育むふるさと教育と高校およびその後の進学、社会人経験を経て広い視野・視点で学んで地元に戻って働く、起業する人材を生み出す循環型教育を大切にしたい。

（４）　高校を若者の集積拠点として位置づけ地元は全力で生徒と高校を支援する

地元５町村が、地域存続の要の一つとして「県立高校の存続と拠点化」を位置づけ、長期的には過疎対策として、子育て支援のさらなる強化、産業・雇用の創造を展望しつつ、文化拠点・若者の集積拠点としての高校の存続のために、予算措置を伴う強力な支援、協働を行なっていただきたいということを要望する視点です。

（５）　県教育委員会の「地域課題探求型」の教育活動を重視する

「４．県教育委員会の新たな方針」の（３）を中心に、関連個所を最大限具体化し活用していくことを大切にしたい。

こうした立場と視点を踏まえて、とりわけ高校関係者、地域市町村行政と関係者の皆様に、ご検討をいただくための材料として、問題意識を申し上げます。

６．　魅力化・特色化のための理念、指針、目標をどう考えるべきか

（１）理念と指針

①阿南高校は何のため、誰のために存在し、何に貢献するのか（存在意義と役割の再明確化）

を改めて深めることが大切ではないでしょうか。

⇒「地域を知り、地域を深め、地域を創造する」ことに貢献する。

⇒生徒の人間力（問題解決能力と人間関係形成力）を育て、地元地域に貢献できる人材を育てる。自分で考え、判断し、表現できる、物事を構造的にとらえ、いわば「仕事がないから地元を離れるではなく、起業するために地元に残る、戻る」人材を育てる。

⇒基礎的な学力の習得と実践を通じて、コミュニケーション能力を育て、生徒が自信をもって社会に出ていけるようにする。社会人としてのしっかりとした基礎力を育てる。

⇒地域への愛着と誇りを広く深く育て、特に文化・スポーツ活動の地域拠点として若者の声が響く学校を作り上げる。

総じて、「地域から必要とされる」「地域になくてはならない」「地域とともに歩む」高校に自己改革を遂げることが求められている。

②こうありたい、かくありたいという目指す像・イメージ

基礎学力の強化向上をはかりつつ、社会的能力（考える力、表現する力、ともに行動する力など）の習得、向上をはかることができる学校

③「魅力・特色ある高校づくり計画」を作成し実践する上での指針（重要視点・留意点）

・地域と時代のニーズに合致しているか

・在籍生徒、地元中学生、保護者のニーズに応えるものか

・外から（長野県と日本から）のニーズや期待に応えられるものか

・改革性、変革性とリアリティ・実現可能性を有しているかどうか

・地元地域との協働可能性と財政問題に対応できるか

・魅力化、特色化計画の推進を支え支援してくれる中核人材の確保は可能か

（２）目標を考えるうえでの問題意識や必須の条件

①今後（令和１４年度まで）の中学卒業生は遠山中学を含む下伊那郡南部５町村で平均８５名。飯田市で９００名、下伊那郡西部（阿智、平谷、根羽）および下伊那郡北部（高森、松川、豊丘、喬木、大鹿）地域で 450 名、飯田・下伊那郡全体で１４００名程度と推測されます。

このことを踏まえ、阿南高校は、下伊那郡南部地域の卒業生が在校生の半数を超えるように、かつ、広く山村留学などの全国からの進学者も受け入れるスタイルを作り上げたい。

→　目標＊阿南地域からの進学者を卒業生の＜５０％/４０名＞確保したい。

②飯田、下伊那郡北部から３０名、全国募集を可能として、１０名の確保。

一学年合計８０名で、全校で２４０名の生徒の集う学校をイメージしたい。

③そのために、環境整備として、全体で 40 名程度の民泊・下宿施設と可能なら学寮・宿泊施設を確保する。民泊施設については地元個人有志及び地元企業の協力をお願いしたい（兵庫県立村岡高校）。学寮の場合の建設費用は町村と県・国からの財政支援、民間企業の応援をお願いしたい（広島県立加計高校）。生徒には、宿泊費・食費代の補助を検討する（兵庫県香美町）。地元地域からの入学者には、返済不要も含む奨学金の貸与を検討する。地元からの大学、専門学校への進学者には、奨学金の支給も検討する。

④教育課程の構築やスポーツ・文化活動の推進のための教員人材や支援スタッフの確保およびそのための支援が必須です。

（３）めざしたい学科、コースなど教育課程の構想

学科・コースの構想はあくまで例示です。具体的内容は、専門家である高校や教育委員会に深めていただければ幸いです。

＜前提となる基軸・ベースの考え方と特色ある学科を含む複数の学科・コースの設定、単位制および「少数・丁寧・同伴型教育方法で」＞という点を大切にしたい。

１）基軸の考え方

①基礎的学力をしっかりと身につけ社会で生き抜く力を育てる

低学力を克服し、対象の課題化と問題解決能力の育成および人間関係形成能力の育成

②南部５町村を「あるがままに、ありありと、あますところなく」知って、深めて、理解する地域探究活動（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）を推進し、理論とフィールド活動を通じ、地域社会に貢献する意欲的な起業型人材を目的意識的に育成する。

③上級学校への進学などでいったんは故郷を離れても、再び何らかの関係性を持つ「関係人口」や「Ｕターン型人材」を育成する循環型教育の推進。「循環型教育のポイントは、小学生時代からの地元への愛着を育てるふるさと教育と地元を元気にする起業家的人材を育て、将来は地元地域に還流する人材の育成を意識的に追求することにあります。

２）特色ある学科と自由選択可能な複数のコース（「特進科」と「普通科」と特別な「類型コース」）の組み合わせを考えて、教育課程の柱を編成する

Ａ　普通科一般コース・類型（進学と就職の選択可能）⇒地域貢献人材を育成

①医療系・福福祉系の大学、専門学校への進学を目指すコース。

介護福祉士の資格を取得できるコース（当面は卒業後国家資格試験を受験）

②情報・商業・ビジネスコース

「商業簿記・パソコン実務」の基礎と応用

Ｂ　普通科地域コース・類型（「地域探究学Ⅱ、Ⅲを追求」）⇒公共機能の担い手育成コース

③地域学、地域文化探究、信州学、公共政策コース

進学も就職も選択可能

④ＳＤＧｓ環境保全・防災学コース

Ｃ　アウトドアスポーツコース・類型　⇒地域資源を活かした社会体育スポーツ人材の育成

下伊那郡南部地域の天竜川と各河川、里山、伊那山脈、南アルプスなどの地形を最大限度活用した岩登り、登山、ラフティング、オリエンテーリング、マラソン、ボルダリング、キャンピングなどなど野外健康スポーツを理論学習とともに実践しつつ、将来は社会体育の育成リーダーをめざす。体育系の大学や専門学校をめざす。

Ｄ　英語・英会話教育の重視をベースに難関大学も含め大学進学を目的意識的に追求する特進学科

(英会話に慣れ習熟し、数Ⅲ・物理まで、海外ホームスティ研修、全国募集の採用)

(将来Ｕターンを期待しつつ、生徒個人の能力の最大発揮・開発と広い社会的ステージでの活躍を可能に）⇒　「学科」として文系・理系１０名ずつ。

（４）考えたい学科、コース、類型のイメージ（前項の４つのコース視点を踏まえて）

前項で意図した教育課程の柱の構想は、次のような認識によります。

① 地元保護者のニーズは、根底的には、進学と就職のサポートと保障、即ち、上級学校への進学を応援してほしい、もう一つは、将来、社会人として自立して生き抜いていける力を身につけられるようにしてほしい、という願いにあります（オーソドックスな学力の強化と人間力、思考力・行動力の習得）。

②高校の将来存続を展望して、募集範囲は広く域外からの募集を可能にする条件をつくる（文化と自然の地域資源の魅力を最大限度活用する）

③昭和３０年代初頭の「陸上の阿南」、昭和４０年代までの「ボートの阿南」、昭和６０年代・平成時代の「阿南の野球」にとつながる特色ある活動を再びつくりあげる、という方向の中に、高校存続の可能性の芽が存在しているのではないかと思慮します。

この発想は荒唐無稽なものではなく、文献調査や現地訪問をした全国の過疎地域高校のアプローチの先進事例を分析した結果に基づくものです。

ポイントは、 ① 地域探求型教育の推進
② 文化・スポーツ活動の徹底強化・特色化
③ 難関大学あるいは特別な芸術・工芸・料理関係学校への進学教育
④ 少人数・丁寧・同伴・生きる力を育てる教育の推進

のいずれかに、もしくはそれらに総合的に取り組んでいることから、阿南高校においても素直に学んで実践してみることが鍵ではないかと考えたところです。以下、具体的な学科・コース・類型イメージです。

１）医療・介護指向コース

将来は制度的に卒業時に、「介護福祉士」の受験資格を獲得できる授業コース。また、進学して、将来めざす資格は、理学療法士・作業療法士・介護福祉士・精神保健福祉士・社会福祉士・公認心理士・臨床検査技師・看護師などを目指します。

介護福祉士は介護職として働きながら受験して資格の取得ができますが、ほかの資格は専門学校、大学への進学と学習、受験が必要です。進学先のミスマッチングによる挫折を避けるために十分な「仕事理解」による選択を在学中に行います。いずれの職種も学費負担の少ない公立系養成機関は難関です。きちんとした進学学習が必要です。

【事例】甲府市甲斐青和高校、長野県上田千曲高校など（介護福祉学科という位置づけで学科設定をすると専科教員の配置と福祉科目の習得単位が非常に大きくなり、生徒の募集に苦戦をしている面があります。）

２）情報ビジネス指向コース

将来めざすのは、就職あるいは大学の情報系学部や情報系の専門学校。ここを経て、企業の情報システム系の業務に就く。中小企業では特に人材が不足しています。

情報系の大学や専門学校の卒業生は、ほとんどが大企業に就職していて人材の奪い合い状態

です。中堅企業、中小企業では貴重な人材となります。

【事例】愛知県立一色高校（西尾市　中規模校　生活デザイン科に特徴あり）

情報ビジネスコースは、普通科の中でも情報系と商業（ビジネス）系の科目を中心に学ぶコース。２年時以降に編成され、大学進学もサポートする。二年時には週７時間の専門科目。「商業簿記」もしくは「情報の表現と管理」を選択できる。三年時には、「課題研究」に「商業・財務会計」あるいは「情報システムのプログラミング」を選択する。各種検定を受験できます。「情報コース」の事例は全国に少なくありません。

３）地域学・地域文化探究コース

①将来めざすのは、市町村・地元企業・各種社会施設・公共機能組織に就職

（専門学校や大学を出てＵターンのケースも含めて）

地元のリーダー層になっていく人材を目的意識的に育成するコース（地域探究学のⅡ、Ⅲを習得し地域で学ぶ活動を重視する）

授業の一部として、地域の生活、産業（農業・林業、工業など）、文化・歴史・地理（民俗芸能・工芸など）、人々に触れ、学びと実体験を進める。地域の魅力を知り、体感し、特に親と教師以外の大人との接触の少ない生徒たちの人間認識を多様化・深化させる。将来、地元地域で活躍をすることを望む人材が育つことが期待される。特に南部地域は民俗遺産の宝庫でもあり民俗芸能については担い手の継承者としても期待されます。

【事例】浜松学芸中・高等学校、兵庫県立村岡高校、宮城県立志津川高校（現南三陸高校）、島根県立隠岐島前高校、新潟県立阿賀黎明高校などなど

４）SDGs 環境保全・防災対策指向コース

将来めざすのは、自治体の自然環境保全関連業務、災害対策業務、林業支援業務など。更に大学の専門課程を経て、企業などの自然環境保全、災害対策、安全対策業務などに関する専門業務。

自然環境保全、災害対策に関して専門知識を持つ人材は、あらゆる分野で求められている。ここ阿南高校は、森林、河川、段丘、峡谷、地下水など自然環境保全のフィールドワークと基礎知識を学ぶには好適な立地と考えられます。

【事例】愛知県立海翔高校の防災コース。環境保全系は農業・林業系高校に見られる。

５）アウトドアスポーツ指向コース

下伊那郡南部の地域的、自然的環境を最大限度活かして、野外スポーツ活動の実践と理論を学ぶ。山村留学も含めて全国区からの応募を特に意識する。集団でチャレンジし、健康と楽しさと協働性を身に着ける実践活動を重視する。町村のいろいろなスポーツイベントの企画や運営を担い、スポーツマネジメントを身につける。（兵庫県立村岡高校）

６）英語・英会話を重点にした特別進学コース

徹底して英会話・英語の重点的習得と大学進学を目的意識的に追求します。「英語の阿南」「英会話なら阿南」と言われるレベルを目指します

卒業時にＴＯＥＩＣで６００点以上の会話力を身につけます。将来めざすのは専門学校、大学

を経て、広い社会的フィールドでの活躍。就職でアッピールできるのは６００以上（中上級者）です。

【事例】松本県ヶ丘高校、長野西高校、飯田風越高校など。全国的にも少なくない。

7）**学年枠を取り払い、全生徒を 5 グループ程度に分けて、総合型学習の推進**を組み込むことも考慮されてよいと思います。事例を挙げれば、

① 民舞・民俗芸能・和太鼓
② 吹奏楽団
③ 郷土料理の伝承
④ 環境保全・美化活動
⑤ 福祉たすけあい活動
⑥ アウトドアスポーツ系活動
⑦ 地元小学生とのチャレンジ交流　などの企画です。

（5）生徒の人間力の育成と集団活動の大切さ（文化、スポーツ活動）

いくつかの教育課程構想に加え、人間形成の上で極めて重要なのは、生徒自身の集団活動を通じた人間性、人間関係形成能力の向上です。

そのために、少人数校ではあるが、生徒の自主性、自立性、協働性を育てる課外スポーツ・文化活動を重視する。「あのスポーツ、あのクラブ活動ができるから阿南高校に行きたい」という生徒の目標となる活動を、授業とは別に作り上げる。

スポーツ分野では、男子は陸上駅伝部の創設と野球部の復活。女子は、同じく陸上駅伝部、女子野球もしくはソフトボール部を検討する。（石川県立門別高校、宮城県立志津川高校の事例）

文化分野では、「民俗芸能」（地元文化遺産＋音楽・演劇など）を学び、実践し、継承する活動の推進。

高校単独で準備できない場合は、阿南地域全体で行政の支援の下、スポーツ系のジュニア・シニアクラブを設けて、学校（小学校から中学・高校まで）と自治体の枠を超えて相互連携したスポーツ活動を活発化させる。

5 町村には、中学の生徒数の減少の中、一例として毎週土曜日の午後には、阿南ジュニアスポーツクラブ（陸上と野球など）を阿南高校で、もしくは中学巡回で開催し、送迎バスと支援スタッフの提供、派遣をお願したい。兵庫県香美町の村岡高校の事例では、町の企画課、教育委員会総務課、同生涯学習課が定期的に会合を持ちつつ、町内の児童生徒と高校、高校生徒の協働活動を支援しています。

また、中山間地域としての交通事情、物理的・時間的制約や地元南部地域からの生徒数が全体の三分の一であることから、多人数の集団的な自主的クラブ活動が難しいとの認識もあります。

ついては、思い切って、「囲碁・将棋」「オセロ・チェス」「百人一首・かるた」「英会話・演劇」「数学・科学」「新聞・歴史」と言った少人数でも６０分以内でも活動できる自主的クラブ活動の推進が考慮されるべきではないかと考えます。

更に県の施設である「阿南少年自然の家」との連携した屋外活動の推進も意義があると考えます。

このテーマで決定的に重要なことは指導者の確保です。熱意と力量のある教員、企業からの派遣スタッフなどリーダー人材の確保をお願いしたい。

７．条件整備・活動支援として高校、地元行政にお願いしたいこと

対外折衝の課題を除いた「魅力化・特色化」へのアプローチとして要請をしたいこと

１．　域外募集・全国募集の環境づくりに正面から取り組むこと

まず、町村と地元住民、企業の協力と支援で、遠距離通学生徒と域外・全国募集生徒に対応する民泊下宿の確保と財政支援（下宿代、食事などの費用の支援）。次に本格的には、県や国の支援も得て学寮の設置をはかること

２．学力の裏付けがあり学習意欲の高い生徒や地元出身の生徒への奨学金など財政的支援

３．高校と地元町村を結び、生徒の活動支援をサポートする連携教育コーディネーターを地元町村財政、あるいは県費の活用で配置をすること

４．地元町村の教育委員会に高校連携担当を配置し、小学校・中学校とも連携した一貫性のある「ふるさと教育」の企画推進をはかる。町村の各種文化・スポーツ企画の運営に阿南高校の生徒が参加し協働活動ができる機会を用意していくこと。ふるさと教育の目的は、

①地元への愛着心の涵養

②関係人口づくり

③若者が集う居場所づくりにあります。

５．生徒の「地域で学ぶ」活動を推進するために、地元町村の文化、歴史、自然、生物、産業などにかかわるさまざまな人材のプラットホームを整備すること。「人材バンク」「地元の物知り博士」を集め、児童・生徒に教え伝承するとともに、高校生には「学び、教える」力を育てる。

６．地元出身の大学生のネットワークをつくり、在校生支援（学習、スポーツ）や地元町村の諸イベントへの協力をしてもらう。教育委員会が主導し、その呼びかけを行う。

７．兵庫県香美町にみられる「土曜チャレンジ学校」のような児童と生徒が交流して、地元の資源を活用した野外諸活動（スポーツ、生物・植生調査、川遊びなど遊びの要素を入れた交流活動）を展開する活動の研究と支援

８．こうした諸活動を効果的に進めるために「連携教育コーディネーター」と「担当教員（高校＋義務教育）」、教育委員会スタッフ、地元の学校応援ボランティアで構成する「学校連携協議会」のような組織の設置の検討をお願いしたい。（実務性の高い組織として）

９．更に、大きく「高校と地域の連携・協働活動」を推進していくために、５町村による「阿南高校協力会」の下に、関係者を総結集した諸活動推進の総合的なヘッドクオーターとして「高校・地域創造プロジェクト」の設置を検討していただきたい。（活動の方略を検討し示す組織として）

10. 県の教育委員会には当面以下の点を要望したいと思います。

（１）阿南高校の「中山間地存立特定校」への指定

（２）「特定校」への教員配置に関しては、当該高校と地域の意欲や努力を踏まえて、通常の「定員基準」にこだわらず、経験や専門分野や文化・スポーツ活動に熱意のある教員の配置をご検討いただきたい。

（３）高校と生徒の諸活動にかかわる「広報活動」や「活動成果の発表にかかわる文献・パンフレットの作成」「域外募集や遠距離通学生徒を支える下宿費の補助」など諸活動への財政的支援をご検討いただきたい。

11. 英語教育では実践英会話教育をメインにしたカリキュラムとサポート人材の確保、支援システム、自主活動（英会話、英語劇クラブ、遊びから英会話の環境を）の推進を岡山県奈義町の事例なども参考にしてご検討いただきたい。

12. 教育課程の編成については。高校としての自主性が尊重されるべきと考えますが、高校特色化を念頭に置くとき、大切なポイントとなる要素です。

学年別・クラス別編成をベースにしつつ、できるところから。

①地域探求の（Ⅰ）にあたる基礎コースは一学年共通、

地域探究（Ⅱ）（Ⅲ）は、「地域を知る（Ⅰ）」から、地域行事、イベントの運営や、会社・各種施設訪問と体験学習を経て、「地域の問題を課題化」して「その解決方向について研究する」レベルまで展開する。

②基礎学力の習得・再確認授業を重視する。教員配置上の県からの配慮を得るとともに、授業は基本的に少人数、同伴型で、まず生徒の安心感、意欲、自信を引き出すことに注力。生徒と先生の距離感が近いことの強みを活かし、親切・丁寧な学習活動を推進する。生徒の自己肯定感が高まり、「自分は阿南高校に進学して、『確かに変わりました』と言ってもらえるサポートをお願いしたいと思います。

③域外・全国区募集を構想し、特色あるコース・類型の研究と検討をお願いしたい。

13. 現在の施設や自然環境を最大限活かした環境整備と活用をお願いしたい。

貴重な川田グランドをはじめとする諸施設、設備の維持、適切な管理と改修、地域の住民や企業関係者、子供たちが柔軟に活用できる仕組みの設計・運用など。

14. まとめると、これらの推進には、特に

① 教育課程を支える教員の中核人材の確保と「定員基準」の柔軟な運用による人員の配置

② 地元市町村の人的、財政的協力（先ずは第一歩として、高校・地域連携のための教育コーディネーターの配置・派遣を）

③ 地元の住民　団体・企業・社会福祉施設などの理解と協力支援、

④ 保護者・ＰＴＡの理解・協力

が必要ですが、

他県、他校の実践的な経験からは、地域政策を研究している大学との提携とその支援を受けることがこれらの活動の展開のうえで、非常に重要で貢献をしていると考えます。

⑤ 大学などとの提携をご検討いただきたい。

大学との提携は、村岡高校などの経験からも非常に有意義であり重要だと思います。対象としては、愛知大学（豊橋市）の地域政策学部、松本大学、法政大学（東京）などが長野県の南信地方や愛知県奥三河地域の地域政策の研究活動、フィールド活動を積み重ねておられますので、活動の理論的、実践的アドバイスや教育課程の構築、授業実践で

協力をいただければ有意義と思われます。

⑥ 諸課題を総合的に推進するために、将来的には「教育創造・地域発展プラットホーム」として、南部５町村地域のあらゆる関係者・人材の英知と実績を集約して、「高校を地域になくてはならない存在」につくりあげていくための、そして活動の継続を担保する新組織のたちあげ、が必要と思われます。（実践的かつ研究的な）

繰り返しになりますが、以上の方針の前提は、

（１）地域に貢献する人材づくりを目的意識的に追求する視点をベースに

（２）１０年後を見通し、域外・全国からも生徒を集められる条件づくりと

（３）地元の要望でもある「進学・就職の支援をきちんとしてくれる」ことおよび「低学力生徒を受け入れ、社会的に自立していける育成」をともに推進する

（４）「集う」「学ぶ」「楽しむ」「元気になる」学校づくり

の課題にチャレンジしたいということす。

８．全国の優れた事例に学ぶ

あらためて同窓会が今回、関係者の皆様に問題提起をさせていただいた事情について申し述べます。

同窓会の性格と役割、その限界性も鑑みると無理をしているとの批判もあろうかと思います。

私たちは、そうしたご意見も踏まえつつ、現状に対する極めて深刻な危機感から、「事態の推移を見守るだけではいけない、なんとかしなければの熱き思い」だけで、提言作成の準備活動に入りました。

その中で、願望だけではなく、先進的な実践事例をよく学ぶ必要があるとの認識から過疎地域で生徒数の減少に悩みつつ、高校と地域が協力をして、高校の存続・発展のために懸命に努力を継続されている１０余の高校の経験を文献・資料調査いたしました。北海道の村立音威子府工芸高校（１１０名,ほぼ全員が村外出身者。住民票の移動が義務。学寮あり）、宮城県南三陸町県立南三陸高校（旧志津川高校が校名変更。１７０名。うち県外から２０名。学寮あり）、新潟県阿賀町県立阿賀黎明高校（４８名、うち県外１６名）、静岡県川根本町県立川根高校（約１３０名、半分が域外からの留学生。学寮あり）、石川県輪島市県立門前高校（２０１０年約２００名、２０２１年５３名、２０２４年８５名。学寮あり。）、兵庫県香美町県立村岡高校（１０８名、域外から９名）、広島県安芸太田町県立加計高校（１１３名。域外から５０名。今では人気校。学寮あり）などです。

また、兵庫県香美町（北但馬地方。鳥取県の県境）の県立村岡高校を現地訪問させていただき、その考え方と実践を学ぶ中で、私たちの願いが決して夢物語ではなく、現実的なアプローチは可能であるとの実感を抱くことができました。

特に、同校の経験は私たちを大きく励ましてくれました。高校のある香美町村岡地区（平成の合併前は村岡町。人口は 4,000 人余り）は、阿南町とほぼ同人口であり。香美町全体の人口は、16,000 人で、阿智村と平谷、根羽村を加えた下伊那郡南・西部の人口 17,000 人余りと全く同じ規模です。そこにそれぞれ県立高校が二つずつ（村岡高校、香住高校と阿智高校、阿南高校）存在

しているのです。県立村岡高校の生徒数は１０６人で、阿南高校と全く同規模です。この村岡高校の実践から、私たちは次のようなことを教えていただき学びました。

１．高校と地域の将来への強い危機感・危機意識を全住民的な共有認識にすること
２．高校の存続・発展（魅力化・特色化）活動の成功の鍵は「高校の発展と地域の発展は一体的なもの」であるという共通認識にすべての関係者がたちきれるかどうかにあります。
　もっと言えば「高校存続の要求」ではなく「地域から必要とされる高校」になるように高校自らと高校の応援者が脱皮、自己改革していくことです。特に、高校と地域行政の関係が「協働関係（ウイン・ウイン)」として本気で継続されなければ、一時的な統廃合反対運動にとどまってしまいます。
３．それは住民の自覚的な「地域づくり」の取り組みと軌を一にした「高校の内実づくり」の取り組みであると言えます。
４．今日的な「学力とは何か」「生徒の成長とは何か」を考え、問い続ける取り組みでなければなりません。
５．高校教育の目指すところ、学力向上の本質は、生徒の人間性と人格の形成/向上に資するものであると同時に、「地域社会の存続・発展」に繋がるものとして考えたいということです。
　本当の学力は、狭義の知識教育、受験教育ではなく、自分で考え、判断し、表現し、行動のできる主体の形成に意味を持つ「力」のことです。
６．高校は地域と住民に学び、地域と住民は高校に学ぶ、ウイン・ウインの関係性の中での「協働・連携関係」を発展させることが鍵です。そのためには、活動の継続を担保する仕掛けとして教育創造・地域発展のプラットホーム（熱意ある現役教員、地域在住の退職教員、義務教育の教員、行政と地域企業、住民、PTA 保護者と同窓会の協働ネットワーク）を設置する必要があります。それは「地域・高校協働」の推進力となるものです。定期的に「高校フォーラム」などを開催し、高校と地域の認識の共有化と活動実績の蓄積を図っていくことが必要です。(住民総がかりの高校応援組織です)
７．半世紀の歳月を経て、今日、高校教育はほぼ全員入学の事実上の「義務教育」になりました。その条件変化の中で、地域在住の生徒はその生徒の希望と能力に応じて、一定の地域内の高校で教育を受ける権利があるし、高校はそれに応えきる責任があります。阿南高校は、どういう状況にある子供たちも、希望があれば引き受けていく姿勢が必要だと思います。
８．高校と地域の協働関係の現状を改めて棚卸をして、プラットホームに集約し、めざす阿南高校像の姿を共有化しましょう。
　村岡高校の実践で、有効と思われる考え方、方法、アプローチの事例は、次のようなものが参考になります。
　（１）「地域を学ぶ」から「地域で学ぶ」に考え方を発展させ、単なる体験型教育ではなく、地域をフィールドにして課題と向き合うことを通じ、「考える力」「表現する力」「行動する力」を育てる。これを軸に「循環型教育」を志向する。
　（２）低学力の生徒を対象に、「習熟度教育」を「丁寧。親切、同伴型」で推進する。
　（３）生徒一人一人の変容に丁寧に気を配る。その眼目は「自己肯定感」を高める実践。「他人と比較する競争的自己肯定感ではなく、共感的、受容的な自己肯定感」を追求

することです。

（４）「地域に開かれた高校」とは何かを再度深める。その内容を高校側、地域・住民側から、意味、内容、その量質を問い直す。

（５）生徒にとって地域の住民・大人と接触、交流、議論、協働することの格別に大切な意味を考える。

（６）知識の習得・蓄積重視の教育から「構造力」を大切にした教育に力点を移す。

ものごとを論理的に考え、展開し、創造し、実践できる能力の涵養を。その実践を通じて、一つの「村岡メソッド」を作り上げたのが村岡高校の２０年の教育実践です。毎年数名の国公立大学への進学者、関西地区の有力私大に進学者を出しています。(学年３０数名のうちの三分の一ほど)「メソッド」を築いていく上で、大学との高大連携は非常に重要です。

９．終りに　「永えに地域のシンボルたれ」の理念にたちかえって

町から「若者の声が消える」寂しさ。「若者の声」「子供の声」が響く町中の嬉しさ。たとえ数年間でも若者がいてくれる喜びを幸せとしたい（広島県立加計高校のある広島県安芸太田町の住民の声です)。

新任教師の目に映った村岡高校。「軽いのりの職員室。新しいことを何か面白そうと取り組む皆の雰囲気。各行事は日程消化型ではなく、毎回、何かしらのわくわく感と楽しさがある。この学校は生徒と教師の距離が本当に近い」

村岡高校を支える関係者の「今までは人材を育てて都市部に送り出し活躍させる学力教育だったが、これからは違う。少人数なりに自己肯定感の高い魅力的な『個性』の生徒を育てたい。その心に故郷への思いを少しでも抱いてもらえたら喜びだ」という声を胸に刻みたい。

下伊那郡南部の村々に教育の光を求めた組合立の阿南高校。県立高校として７０数年。

設立の歴史的事情を改めて踏まえ、今日の少子高齢化社会の中で急速に進む過疎化、人口減を乗り越え、地域再生と深く結んで高校の存続・発展のために、「地域と高校とすべての関係者の協働」で、直面する事態に対応できるよう南部地域の町村の皆様の格別・格段のご支援を心からお願いいたします。

以上

【同窓会　特色ある阿南高校づくりワーキング・グループ委員名簿】

座長	木下　長義	１９回生	神奈川県	関東支部長
委員	金山　明弘	１５回生	愛知県	中京支部長
委員	小林　幸二	１９回生	山梨県	
委員	赤羽　孝之	２０回生	飯田市	
委員	熊谷　和史	２４回生	飯田市	
委員	熊谷　充子	２６回生	阿南町	

アドバイザー　宮下　聡（都留文科大学元特任教授）

【ワーキング・グループの提言検討経過】

グループの発足	令和６年１１月　２日
第１回　会議	令和６年１１月２７日
第２回　会議	令和６年１２月１８日
第３回　会議	令和７年　２月　５日
第４回　会議	令和７年　３月１７日
第５回　会議	令和７年　４月２３日
視察訪問	令和７年　１月２９日から３１日（兵庫県香美町　県立村岡高校）

【文献調査、資料調査をした全国の高校】

北海道村立音威子府工芸高校
宮城県立志津川高校（現在　南三陸高校）
新潟県立阿賀黎明高校
石川県立門別高校
静岡県立川根高校
兵庫県立村岡高校
島根県立島前高校
広島県立加計高校